

「もったいない」世界観がフードロス削減行動に与える影響*

久保栄太^a・齋藤悠大^b・田中伶佳^c

2022年1月7日

要約

日本人特有の「もったいない」精神と日本の食品廃棄量に着目し、「もったいない」という価値観が強いほど、フードロス削減に貢献する行動をする傾向がある、という研究仮説を検証した。Google Formでアンケートを作成、拡散し、237件の有効回答を得た。アンケート調査の回答に基づき、単回帰分析と重回帰分析を行った結果、単回帰分析では「もったいない」世界観の各構成要素と、すべてのフードロス削減行動を問う質問11個のうち10個で有意な相関があることが示された。さらに、重回帰分析では、「もったいない」世界観の2種類の要素と、5個のフードロス削減行動を問う質問で有意な結果が得られた。今後、「もったいない」の社会規範に影響するナッジの効果等を研究していくことによってフードロスを削減するための施策に貢献することができると考えられる。

・JEL分類番号:D9

・キーワード:もったいない, フードロス, 世界観

*本稿は、行動経済学会第15回大会で報告した「「もったいない」世界観がフードロス削減行動に与える影響」を加筆修正したものである。報告した際、プログラム委員に方々から貴重なコメントを頂いた。特に株式会社パパラカ研究所の山根承子氏から研究上重要な指摘を頂き、それについて加筆した。また、毎週の研究活動の中で、大垣昌夫氏、小田島達也氏、西尾安由氏、志田俊平氏からありがたいフィードバックをいただいた。ここに記して感謝を申し上げたい。

^a 慶應義塾大学 齋藤悠大 3110.yudai@keio.jp

^b 慶應義塾大学 久保栄太 kubo1417@keio.jp

^c 慶應義塾大学 田中伶佳 tanare_ka33@keio.jp

1. イントロダクション

近年、SDGsが盛んに取り上げられている。そのなかでも大きくピックアップされているのが、フードロスに関する目標である。SDGsのターゲットの1つとして、2030年までに世界全体の一人当たりの食料の廃棄を半減させることが盛り込まれており、フードロスの削減は多くの人々を飢餓から救うであろう。このようなフードロスの削減目標がある中、日本の実情はどうだろうか。ケニアの環境保護活動家であるワンガリ・マータイは日本固有の価値観の「もったいない」を環境問題の合言葉として世界に広めようとした。しかし、日本は世界で3番目に多くのフードロスを生み出している国である(環境省, (2021))。日本は年間2,531万トン(環境省, (2021))の食品廃棄物等を生み出しており、このうち、まだ食べられるのに廃棄される食品、フードロスは約600万トン(環境省, 2021)とされている。これは、世界中で飢餓に苦しむ人々に向けた世界の食料援助量の1.4倍に相当するものである。一方で、600万トンのフードロスを国民一人当たりで換算すると、お茶碗約1杯分であるという調査(農林水産省, (2020))がある。「もったいない」とは思わないだろうか。

我々は、日本人が持つ独特の「もったいない」世界観がフードロス削減に貢献しているのか疑問に感じた。そこで、日本人の「もったいない」を世界観と設定し、実際に「もったいない」世界観がフードロス削減に貢献しているか検証することにした。

本研究では、世界観の定義をHiebert (2008, 訳文は大垣・田中(2018))より「ひとつの人々の集団が生活を秩序づけるために用いている、現実の性質についての認識、感情、判断に関する基礎的な仮定と枠組み」とした。

次に、もったいないを「世界観」として定義する上で、マータイの環境活動(MOTTAINAIキャンペーン事務局)のホームページを参考した。ホームページによると、もったいないとは「Reduce(ゴミ削減), Reuse(再利用), Recycle(再資源化)という環境活動の3Rをたった一言で表せるだけでなく、かけがえのない地球資源に対するRespect(尊敬の念)が込められている言葉¹」としている。このことを参考に「もったいない」とは、「資源に対するRespect(尊敬の念)」と「環境活動の3R」より、「ものに対して尊敬の念がある」と「ものの価値を最大限有効活用しようする」の二つの構成要素を持つと考えられる。以上より、「もったいない」世界観を「ものに対して尊敬の念があり、また、その価値を最大限有効活用しようとする考え方」と定義した。

『「もったいない」世界観を信じる強度が強いほど、フードロス削減に貢献する行動をする』という因果関係を考えた研究仮説を設定し、これを複数の質問を用いて検証する。さらに、結果から「もったいない」世界観とフードロス削減行動に対する傾向を考察する。

2. 研究方法

研究方法として、アンケート調査を行った。Google Formを利用してアンケートを作成し、大学生を対象にTwitterやLINE等のSNSを用いて無作為に拡散し、237件の有効回答を得た。これらの回答を全て数値化し、質問A～C、質問a～cを説明変数、質問①～⑩を被説明変数とし、説明変数と被説明変数の組み合わせ36件について単回帰分析を行った。また、質問A～Cから一つと質問a～cから一つの組み合わせを被説明変数、質問①～⑩を被説明変数とし、説明変数と被説明変数の組み合わせ108件について重回帰分析を行った。質問A～Cは「もったいない」世界観を構成する「ものに対して尊敬の念がある」ことを問う質問である。また、質問a～cは「もったいない」世界観を構成する「ものの価値を最大限有効活用しようする」ことを問う質問である。世界観の各質問と経済行動の質問を単回帰分析することで「もったいな

¹ MOTTAINAIについて、MOTTAINAIキャンペーン事務局, <http://www.mottainai.info/jp/about/> (閲覧日: 2021/09/24)

い」世界観の構成要素と経済行動の関係性を調べた。さらに、質問A～Cから一つと質問a～cから一つの組み合わせと経済行動の質問を重回帰分析することで、本研究で仮定した「もったいない」世界観と経済行動の関係性を調べた。

質問①～⑪は経済行動に関する質問を行った。主に「食品購入時」、「外食」、「家庭内での食事」、「賞味期限」、「持ち帰り」の五つのシチュエーションでフードロスを削減する、またはフードロス削減に繋がる行動を質問した。フードロスを削減する行動とは、食品購入時に賞味期限切れ等で廃棄しないような購買行動を取っているか、食べ残しや廃棄をしないか、食べ残しても持ち帰りを行うか、である。具体的な質問内容については付録に記載する。

3. 研究結果

3.1. 記述統計量

今回のアンケート結果を数値化し、平均値、標準偏差、最大値、最小値の記述統計量を計算した。

表1 記述統計量

質問内容	平均値	標準偏差	最大値	最小値
年齢	20.46	0.91	23	18
性別	0.52	0.50	1	0
世界観A	4.35	0.94	6	1
世界観B	4.59	0.91	6	2
世界観C	4.72	1.41	6	1
世界観a	4.37	1.00	6	1
世界観b	4.72	0.90	6	2
世界観c	4.59	1.10	6	1
①食品の購入	3.44	1.27	6	1
②食品の購入	4.71	1.00	6	1
③食品の購入	4.13	1.39	6	1
④外食	4.96	1.06	6	1
⑤外食	4.79	1.20	6	1
⑥外食	5.15	1.08	6	1
⑦外食	4.66	0.56	5	1
⑧家庭内の食事	4.62	0.63	5	1
⑨持ち帰り	63.71	48.87	160	0
⑩持ち帰り	312.24	271.69	1600	0
⑪賞味期限	4.22	2.98	10	0

注) 女性を0, 男性を1に置き換えた。

記述統計量をもとに、質問の評価を行う。総評として、質問でおおむね偏りのない回答が得られており、今回の標本が分析の信憑性を損なう問題をはらんでいるような質問であった可能性は低いと考える。平均値、標準偏差、最大値・最小値よりと基準に見ていく。まず平均値について、全体として最大値に偏っているが、一方で、特に世界観と経済行動の質問の回答の1から6の6段階の質問で、平均値が5を超えたものは2つだけであり、また、結果として平均値が6段階のうち5を超えているのは質問⑥の1つだけとなった。以上より平均値の最大値の偏りから分析の信憑性を損ねるような質問の不備があったことが示されている可能性は少ないといえる。

次に、標準偏差について、世界観と経済行動を問う17個の質問の回答うち、15個で0.9以上の値を得た(最大値6, 最小値1とする)。質問時の最大値が最大値6, 最小値1出ないものに関しては、最大値6, 最小値1に換算し計算した。±0.9以上のズレが標準的であることから、標本には十分なばらつきがあることが示唆される。標準偏差の値が低かった質問⑦(標準偏差0.56), 質問⑧(標準偏差0.63)については、家庭・外食において食べ残す頻度を問う質問だった(図1, 2)。これらの質問で「毎回食べ残す」の回答者がいずれも7割近くを占めたことから、標準偏差が小さくなっている。しかし1~3回食べ残すという回答も3割近くあり、分析の信憑性を損ねるほどの偏りである可能性は少ないといえる。

最後に、最大値・最小値について、最大値・最小値に十分なばらつきがあることから、回答の偏りが分析の信憑性を損ねる可能性は少ないといえる。世界観と経済行動を問う17個の質問の回答うち、13個で、質問の選択肢として設定した最大値・最小値をどちらも含む回答が得られた。また、残りの4回答については、質問の選択肢として設定した最大値(6)・最小値(1)の幅より、1低い幅(5~1あるいは6~2)のばらつきを持つ回答を得た。

図1 質問⑦の回答結果

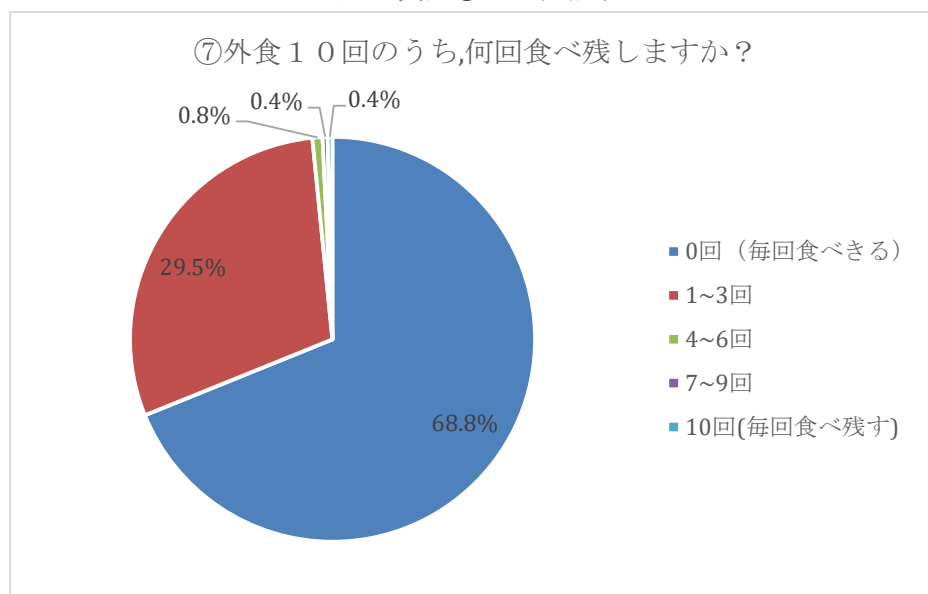
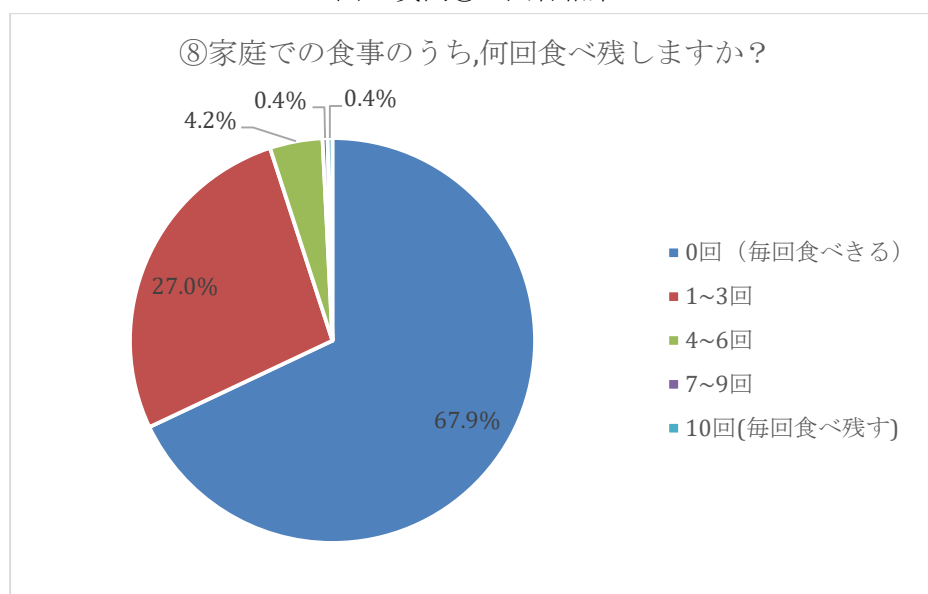


図2: 質問⑧の回答結果



3.3. 単回帰分析の結果

次に、単回帰分析における有意水準10%以下で有意な結果を表に示した。

表2 単回帰分析結果

経済行動の質問	世界観の質問	係数	経済行動の質問	世界観の質問	係数		
食品購入	①	B	0.222112**	外食	⑥	A	0.194094**
	①	a	0.307649** *		⑥	B	0.185827**
	①	b	0.196208**		⑥	C	0.446145***
	①	c	0.173726**		⑥	b	0.395009***
	②	b	0.278527** *		⑥	c	0.132392*
	③	B	-0.16675*		⑦	C	0.303753***
	③	c	-0.20289**		⑦	b	0.125489***
外食	④	A	0.199683** *	家庭内での食事	⑧	A	0.10730281**
	④	B	0.229516** *		⑧	B	0.10555688**
	④	C	0.115445**		⑧	C	0.06873229**
	④	b	0.245617** *		⑧	a	0.07560383*
	⑤	A	0.194094**		⑧	b	0.10729139**
	⑤	B	0.185827**	持ち帰り	⑨	A	13.9078509***
	⑤	C	0.102372*		⑨	b	8.01345014**
	⑤	c	0.132392*		⑩	A	54.5593979***
賞味期限			賞味期限	⑪	a	0.44476204**	
				⑪	b	0.3570038*	

注)***有意水準 1%, **有意水準 5%, *有意水準 10%で有意であることを表す。

3.4. 単回帰分析の結果

次に、重回帰分析における有意水準10%以下で有意な結果を表に示した。

表3 重回帰分析結果

経済行動の質問		世界観の質問	係数	経済行動の質問		世界観の質問	係数
食品購入	③	A	-0.03575	⑧	A	0.10458731**	
		c	-0.19785**		a	0.07216592*	
	③	B	-0.17057*	⑧	A	0.08731752*	
		a	0.012602		b	0.08511238*	
	③	B	-0.0488	⑧	C	0.06479811**	
		c	-0.1811*		a	0.0682322*	
③	C	-0.03583	⑧	C	0.05739413*		
	c	-0.19394**		b	0.08953379*		
外食	④	A	0.151506**				
		b	0.207609***				
	④	B	0.164088**				
		b	0.187268**				
	④	C	0.088262*				
		b	0.218806***				
	⑤	C	0.088262*				
		b	0.218806***				
	⑥	C	0.08156*				
		a	0.129958*				

注)***有意水準 1%, **有意水準 5%, *有意水準 10%で有意であることを表す。

4. 考察

4.1. 概要

単回帰分析の結果から、「もったいない」世界観の各構成要素がフードロス削減行動に与える影響とその性質について考察する。また、重回帰分析の結果から、世界観の二つの構成要素で両方が有意となった結果を用い、二つの構成要素を満たす世界観がフードロス削減行動に与える影響とその原因を考察する。また、世界観の二つの構成要素の内、片方のみが有意になった原因を考察する。

4.2. 単回帰分析についての考察

単回帰分析では、11個の経済行動のうち、10個で仮説を支持する統計的に有意な結果が得られた。本章では、仮説を支持する統計的に有意な結果から、世界観の構成要素がフードロス削減行動にどのように影響しているか考察する。11個の経済行動のうち、仮説を支持しない統計的に有意な結果が得られた残りの1個については、4.4章で考察する。

単回帰分析の結果より、世界観の構成要素である「ものに対して尊敬の念がある」は、外出時のフードロスを抑制する行動と強く相関することが分かった。また、もう一方の世界観の構成要素である「ものの価値を最大限有効活用しようする」は、家庭内での食事のフードロスを抑制する行動と強く相関することが分かった。

まず、経済行動についての質問のうち、世界観の構成要素「ものに対して尊敬の念がある」(質問ABC)と強い相関(世界観の質問のうち2つ以上で有意)が出たものは、質問④⑤⑥⑧(表3)である。この相関関係は、食べ物を廃棄する主体が他人であることによるものだと考える。質問④⑤⑥⑧のうち、④⑤⑥は、外出時のフードロス削減行動について質問したものである。外出サービスは、代金を支払い、食品の調理・廃棄を店舗スタッフに任せるものである、よって利用者は食事を残す・残さないにかかわらず、廃棄に手間をかける必要はない。よって、サービスへの感謝が提供される食事への尊敬の念と強く結びついたと考える。同じような文脈で、質問⑧についても説明できる。質問⑧は、実家住まいの回答者にとって、食べ物を廃棄する主体が自分ではない家族となる可能性が十分に考えられる。よって、実家住まいの回答者からは、質問⑧についても外出と同じ世界観と経済行動の相関関係がみられるのではないかと。

表3 世界観の構成要素「ものに対して尊敬の念がある」と強い相関が発生した質問一覧

質問④	食べられるか考えてから注文する
質問⑤	食べたいメニューがあっても食べきれなさそうであれば注文しない
質問⑥	満腹であっても、できるだけ残さず完食する
質問⑧	あなたは家での食事で、10回のうち何回食べ残しますか

続いて、経済行動についての質問のうち、世界観の構成要素「ものの価値を最大限有効活用しようする」(質問abc)と強い相関(世界観の質問のうち2つ以上で有意)が出たものは、質問①⑥⑧⑩(表4)である。この相関関係は、食べ物を廃棄する主体が回答者自身であることによるものだと考える。質問①⑥⑧⑩のうち、①⑥⑩は、自炊を想定し質問したものである。自炊においては、食品の調理から廃棄まで、基本的には自分自身で行う。よって、食品廃棄量が増えればそれだけ自身の手間が増大する。よって、廃棄する手間を減らし、自炊した料理を完食しようとする気持ちが、ものを有効活用する世界観の構成要素と強く結びついたと考えられる。同じような文脈で、質問⑧についても説明できる。質問⑧は、一人暮らしの回答者にとって、食べ物を廃棄する主体が自分となる可能性が十分に考えられる。よって、一人暮らしの回答者からは、質問⑧についても質問①⑥⑩と同じ世界観と経済行動の相関関係がみられるのではないかと。

表4 世界観の構成要素「ものの価値を最大限有効活用しようとする」と強い相関が発生した質問一覧

質問①	買おうと決めていた食品以外は買わない
質問⑥	満腹であっても、できるだけ残さず完食する
質問⑧	あなたは家での食事で、10回のうち何回食べ残しますか
質問⑩	あなたは、家で賞味期限が切れたパンを見つけました。食べると健康に問題が生じる期限までは十分な日数があります。このとき、賞味期限の何日後までなら捨てずに食べますか？

4.3. 重回帰分析についての考察

重回帰分析の結果について考察する。重回帰分析は経済行動の質問を被説明変数、質問A～C「ものに対して尊敬の念がある」から一つ、質問a～c「ものの価値を最大限有効活用しようする」から一つを説明変数としたが、今回の考察では二つの説明変数の両方で有意が得られた結果について考察の対象とする。なぜなら、重回帰分析において経済行動と「もったいない」世界観の構成要素二つの両方が有意な結果であれば、本稿で仮定したもったいない世界観の影響を考察することができるからである。二つの説明変数の両方で有意が得られたことを以下では「両方有意」と表記する。

重回帰分析の結果では、「外出」と「家庭内での食事」におけるフードロス削減行動の質問で両方有意な結果が得られた。

有意な結果が得られた経済行動の質問は質問④⑥⑧である。それぞれ有意の原因が異なるため、順に説明する。

まず、質問④「食べきれるか考えてから注文する」について、世界観の質問Ab, Bb, Cbの組み合わせで両方有意な結果が得られた。この結果より、ものに尊敬の念を持っている人ほど、食べきれない量は食べず、無駄な廃棄をしない気持ちが強いことが理解できる。一方で、この結果の信ぴょう性が確実ではないという点についても考察した。質問④では、世界観の質問b「ものを無駄にしない」に、「もったいない」世界観の定義に当てはまらない「金銭的な無駄」も含まれている可能性が考えられるからだ。質問内容から、多くの回答者が食事に対して自分が料金を支払うことを前提している可能性があり、「もったいない」世界観の定義を逸脱した範囲で有意な結果が得られたか否か、発展した調査が必要である。

続いて、質問⑥「満腹であっても、できるだけ残さず完食する」について、世界観の質問Caの組み合わせで両方有意な結果が得られた。この結果より、提供された食べ物に対して、その価値を見出した上で尊敬の念を持ち、最後まで消費する世界観に相関が発生すると考える。一方で、質問④同様、金銭的な無駄、この場合は元を取ろうとして完食する世界観が混同したことは否定できない。

最後に、質問⑧「あなたは家での食事で、10回のうち何回食べ残しますか」について、世界観の質問Aa, Ab, Ca, Cbの組み合わせで両方有意な結果が得られた。この結果について、質問⑧は質問内容から、家庭で食料を消費する行動がフードロス削減につながっていると考えられる。よって、ものを長く(質問cにあたる)丁寧に扱う(質問Bにあたる)世界観以外で相関が発生したと考察する。

4.4. 重回帰分析で両方有意の結果得られなかったことについての考察

重回帰分析において、「食品購入」、「お持ち帰り」、「賞味期限」の三つのシチュエーションにおけるフードロス削減行動で両方有意な結果を得られず、または、片方の構成要素の質問で有意な結果を得たが、もう一方の構成要素の質問では有意な結果を得られなかった。これらについて、世界観の構成要素の両方で有意を得られなかった原因について考察する。

「食品購入」の質問①「買おうと決めていた食品以外は買わない」と質問②「食べ残したり廃棄しそうな食品は買わない」では「ものに対して尊敬の念がある」質問では有意な結果を得ることができず、「ものの価値を最大限有効活用しようする」質問では有意な結果が得られた(質問③については4.4を参照)。原因は二つ考えられる。一つ目は質問の前提条件が回答に影響したと考えられる。質問①、②は食品を購入する前に計画を立てていることを前提としている。そのため食品購入のシチュエーションを想定する際に、計画に沿って食品を買おうとする気持ちが強く働き、尊敬の念を抱く余地がなかった可能性がある。原因の二つ目に、調査対象が原因であることも考えられる。調査対象を大学生に設定したため、実際に食品を計画的に購入した経験が少ないことや、そのために食品を購入するイメージが湧かなかつたことが考えられる。

「お持ち帰り」の質問⑨⑩で両方有意が得られなかった原因は二つ考えられる。一つ目は質問設定に現実的でなかったことだ。持ち帰りに対して課金する場面を設定することで、フードロス削減行動への支払い意思額を測る意図があった。しかし、現実におけるお持ち帰り費用は無料か、有料でも100円程度であり、お持ち帰りに最大でも料理の半額を課金するという質問設定が現実的ではなかった。二つ目に、日本では持ち帰りをしやすい環境整備が追い付いていないことや持ち帰りをする文化が希薄であることが挙げられる。「もったいない」世界観を持っていても、持ち帰りがフードロス削減に貢献することに行動としても、思考としても繋がっていないと考えられる。

「賞味期限」の質問⑪については、「ものに対して尊敬の念がある」質問では有意な結果が得られず、「ものの価値を最大限有効活用しようする」質問では有意な結果が得られた。つまり、賞味期限切れの食品に対しては食品については尊敬の念を抱かず、有効活用しようとする。そもそも、「尊敬の念」は、対象の存在やその性質が高いものと認めるときに発生する。賞味期限の切れた食品、いわば用途の限られた不要と思われる食品に対して尊敬の念が発生するとは考えにくい。そのため、回答者は不要なものをいかに有効活用するか、という問題に焦点が当たると考えられる。

4.5. 研究仮説と非整合的で有意な結果についての考察

最後に、質問③「商品を手前から取る」について、単回帰分析、重回帰分析の両方で世界観の質問B「ものを丁寧に扱う方だ」と質問c「もの持ちがいい方だ」に対して負の係数となり、研究仮説を支持しない、反対の結果となった。

この結果より、「もったいない」世界観が強い人ほど手前から取らない、または奥の商品を取るようになるという解釈ができる。そのようにしてしまう理由について、商品を手前から手に取る行為が、「自分がものを無駄にする行動につながる」と感じるからだと考察する。前提として、「もったいない」世界観が強い人ほど、食品を廃棄する行動を取りたくない。これに該当する人が棚の手前にある商品を購入した場合、すぐに食べられるとは限らないため、自分が廃棄してしまう可能性が高くなる。つまり、自ら廃棄する行動、あるいは廃棄する行動から発生する罪悪感を避けるために、奥の商品、つまり賞味期限が長い商品を取ることが有力な仮説の一つと考えられる。一方で、この仮説を検証するための課題として、「商品を奥から取る」理由について、利己性を測る質問や食べ物に興味に関する質問を加え、分析する事が必要だと考えられる。利己的で、食べ物に興味のある人間は、自分が廃棄する確率を下げるため、また、より新鮮な食品を食べるために奥の商品を取ると考えられるからだ。これは今後の課題としたい。

5. おわりに

今回の研究を通じて、日本独自の価値観である「もったいない」世界観を信じる強度と、フードロス削減に貢献する行動を問う11個の質問のうち10個の質問で、単回帰分析における正の有意な関連があるという結果が得られた。地域文化や所得など欠落変数バイアスが影響している可能性があるが、アンケート調査対象者の年齢(18歳~23歳)までに、「もったいない」世界観が形成されている可能性は高く、フードロス削減行動がもったいない世界観に影響している逆の因果関係は考えにくい。よって、もったいない世界観はフードロス削減行動に貢献するという可能性が示唆される。一方で、もったいない世界観と「商品を手前から取る」行動には負の有意な関連があり、仮説と非整合的な結果が得られた。これには、商品を手前から手に取る行為が、「自分がものを無駄にする行動につながる」と感じるという理由があると考察した。よって、「もったいない」世界観を信じる強度が強い人ほど、商品を奥から取ることが示唆される。

本研究は、日本には「もったいない」という価値観があるのにフードロスが多いのはなぜかという疑問から開始したが、研究結果より、その一因として、「行動によってはフードロス増加につながる」と関連している可能性が高い。今後日本がフードロスを削減していくためには、日本人が育んできた「もったいない」の考え方を啓発するだけでなく、有効なフードロス削減行動(例えば「商品を手前から取る」行動を普及させることで、フードロス削減が促進される可能性が高い。)を浸透させる必要がある。先人達が残した素晴らしい価値観によって、フードロスという社会問題の迅速な解決に期待したい。今後、研究精度を高めていくことや、「もったいない」の社会規範に影響するナッジの効果等を研究していくことによってフードロスを削減するための施策に貢献することができると思う。

付録 アンケート質問票

・年齢

(記述式)

・性別

選択肢: 男性・女性・回答しない

〈「ものに対して尊敬の念がある」に関する質問〉

A.ものに尊敬の念を持っている方だ

B.ものを丁寧に扱う方だ

C.食べる前に「いただきます」や「ごちそうさまでした」と言う方だ

〈「ものの価値を最大限有効活用しようする」に関する質問〉

a.新しいものを買うより、今あるものを使い続ける方だ

b.ものを無駄にしないことが重要である

c.もの持ちがいい方だ

世界観に関する質問の選択肢: 完全に当てはまる・当てはまる・どちらかという当てはまる・どちらかという当てはまらない・あまり当てはまらない・当てはまらないの6段階

〈経済行動に関する質問〉

あなたはスーパーで食材の買い物をしています。このとき、以下で示す行動にどれだけ当てはまるか教えてください。

- ① 買おうと決めていた食品以外は買わない
- ② 食べ残したり廃棄しそうな食品は買わない
- ③ 商品を手前から取る

あなたが過去数年間でレストランに行ったときの行動が以下にどれだけ当てはまるか教えてください。

- ④ 食べきれるか考えてから注文する
- ⑤ 食べたいメニューがあっても食べきれなさそうであれば注文しない
- ⑥ 満腹であっても、できるだけ残さず完食する

質問①～⑥の選択肢: 完全に当てはまる・当てはまる・どちらかという当てはまる・どちらかという当てはまらない・あまり当てはまらない・当てはまらないの6段階

⑦10回の外食のうち、何回食べ残しますか？

⑧ あなたは家での食事で、10回のうち何回食べ残しますか

質問⑦,⑧の選択肢: 0回(毎回食べきる)・1～3回・4～6回・7～9回・10回(毎回食べ残す)の5段階

⑨ あなたはファストフード店で600円のハンバーガーセット(ポテト・ドリンク付)を半分食べ残しました。あなたはこれを持ち帰りたいと考えています。ただし、あなたが持ち帰らないと1セットは廃棄され、持ち帰りには費用が掛かります。あなたはいくらまで支払いますか？

質問⑨の選択肢: 0～100円, 100円より高い値段の12段階

⑩あなたは3000円の中華レストランでエビチリとチャーハンを半分食べ残しました。あなたはこれを持ち帰りたいと考えています。ただし、あなたが持ち帰らないと食べ残したものは廃棄され、持ち帰りには費用が掛かります。あなたはいくらまで支払いますか？

質問⑩の選択肢:0～1000円, 1000円より高い値段の12段階

⑪あなたは、家で賞味期限が切れたパンを見つけました。食べると健康に問題が生じる期限までは十分な日数があります。このとき、賞味期限の何日後までなら捨てずに食べますか？

質問⑪の選択肢:賞味期限が過ぎたら食べない, 1日～1日, 10日以上以上の11段階

引用文献

大垣昌夫・田中沙織, 2018, 行動経済学, 有斐閣

環境省, 2021,「我が国の食品廃棄物等及び食品ロスの発生量の推計値(平成30年度)の公表について」<http://www.env.go.jp/press/109519.html> (閲覧日:2021/09/24)

農林水産省, 2020,「食品ロスの現状を知る」aff, 2020年10月号https://www.maff.go.jp/j/pr/aff/2010/spe1_01.html (閲覧日:2021/09/24)

Hiebert, P.G 2008,Transforming Worldviews: An Anthropological Understanding of How People Change, Baker Academic